

# 然とあらぬ

# 五百代小田を

# 刈り乱り

# 田廬に居れば

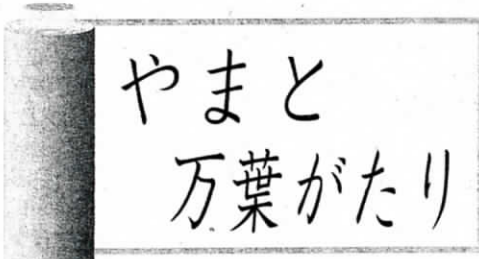
# 都し思ほゆ

稲刈りが行われ、木々も色づく時期となりました。当館の万葉庭園も秋本番です。

当館の展望ロビーからは香具山、耳成山が見えます。その北あたりで詠まれたと考えられるのが、今回掲載の歌です。題詞に「大伴坂上郎女の竹田庄にして作れる歌二首」とある一首目で、竹田庄

は現在の橿原市東竹田町のあたりに比定されています。

大伴坂上郎女は大伴旅人の妹、大伴家持の叔母にあたります。家持の歌に大きな影響を与えた歌人で、女性としては『万葉集』にも多く歌が載せられています。さて、今回の歌には天平11(739)年秋



9月の作という注があります。旧暦の9月は晩秋で、ちょうど今ごろの時期にあたります。小さな田(約1畝)を刈り乱しながら仮小屋にいたり、平城京の方を思い出してしまふ、という歌です。秋の収穫時期に、住み慣れた都を離れて、所有の田地で監督していたようです。普段とは異

なる環境から本来の居場所を懐かしむ気持ち

【訳】わずかばかりの五百代の小田をうまくも刈れずに田廬にいと、都が思われてならない。

大伴坂上郎女(巻八・一五九二)

に美景が詠まれたことが注目されます。

旅先で家を思い、また現地を誉めるといふ歌の組み合わせは、『万葉集』の伝統といえます。そのなかで、泊瀬の美景が詠まれることになったのでしょうか。

万葉文化館では27日まで秋の特別展「こもりくの初瀬 祈りのかたち」を開催しています。秋の散策ついでにいかがでしょうか。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

# 大君は 神にし坐せば

## 水鳥の すだく水沼を 都となしつ

作者未詳(巻十九・四二六)

先日は、442年ぶ  
りという、皆既月食と  
惑星食とが同時に起こ  
る天体現象を楽しん  
だ方も多かったのだ  
はないでしょうか。4  
42年前といえは安  
土桃山時代の158  
0年あたり、当時の  
人々の生活ぶりは簡単  
には思い浮かびませ  
ん。では、80年前な  
らいかがでしょうか。

平均寿命が延びたい  
ま、80年前の記憶を鮮  
明にお持ちの方はたく  
さんいらっしゃるこ  
とと思います。  
『万葉集』にも、80  
年前の出来事を振り返  
った例があります。6  
72年に起こった壬申  
の乱ゆかりの歌を、7  
52(天平勝宝4)年  
2月2日に聞いたまま  
に載せたという記録で

やまと  
万葉がたり

す。壬申の乱を実際に  
見聞きしていた人々は  
すでに世を去り、その  
子孫たちが伝えた歌で  
あったと考えられま  
す。  
この歌は、「大君は  
神にし坐せば赤駒の匍  
匍ふ田井を都となし  
つ」(四二六〇番歌)  
とともに「壬申年之乱  
平定以後歌二首」と題  
して載せられていま

す。「以後」というの  
が直後なのか数年後な  
のか数十年後なのか、  
研究者によって見解が  
分かれていますが、少  
なくとも、752年に  
これらの歌が披露され  
る何らかの機会があ  
り、その時にはすでに  
作歌年次がよくわから  
なくもなっています。  
「大君は神にし坐せ  
ば」とは、壬申の乱を  
平定して飛鳥浄御原  
宮で即位し、律令制に  
基づく新たな国作り  
を進めて、史書の編纂  
(皇立万葉文化館企画  
・研究係長・井上さや  
か)

【訳】天皇は神でいらっしやるので、水  
鳥が鳴き騒ぐ沼を都としてしまわれた。

った天武天皇への讚  
美表現であり、「水鳥  
のすだく水沼」や「赤  
駒の匍匍ふ田井」とは、  
そうした天皇の神性  
を強調するための描写  
です。

# 海原の遠き渡を

## 遊士の遊ぶを見むと なづさひそ来し

巨勢宿奈麻呂(巻六・一〇一六)

て掛けてあったということですから、幾重にも趣向を凝らした風雅な宴であったと考えられます。

11月30日は『ガリヴァー旅行記』(1726年刊)の作者であるジョナサン・スウィフトの誕生日です。ラピュータなど、想像上の国を描くことで当時のイギリス社会を風刺した作品として知られますが、「日本」だけは実在する国名ながら登場します。『御曹子島渡』

『蓬萊』といった日本の御伽草子の影響がうかがえることも指摘されています。

『蓬萊』は『万葉集』にも登場します。この歌の左注には、右の一首は白紙に書いて家の壁に掛けてあった。そこには「蓬萊の仙女の化身である袋纏は、風流な才気ある人のためのものであり、凡

やまと  
万葉がたり

人には見えない」と記されていた、とあります。「蓬萊」とは古代中国の神仙思想で説かれた神山のひとつであり、『山海経』や『史記』に東方の海中にある不老不死の国と記されました。日本ではトコヨノクニとも訓読され、浦島伝説や『竹取物語』にも登場します。

この歌の題詞によれば、737(天平9)年2月に巨瀬宿奈麻呂の家で開かれた宴席で披露されたといふことです。作者は宴席の主催者であった宿奈麻呂であると考えられますが、海の彼方から苦労してここにや席の会場に紙に書いて来た、とまるで蓬萊の仙女が詠んだ歌であるかのように表現されています。宴に参加していた人々が開かれ、不老不死の神仙境が詠まれたのではないかと思えます。(県立万葉文化館企画・研究係長・井上さやか)

【訳】大海の遠い彼方から風流な人々が遊び楽しむのを見ようと思つて、苦心してやつて来たことだ。